

月
の
輪
廻

輪廻^{りんね}の視線はますます険悪に、鋭くとがってゆく

ばかりだ。便所へ行くときに、腹ん中、ぶかぶか言う音を聞いたのだろう。飲み過ぎよ、と顔をしかめる。

新大久保にある居酒屋の、クソ汚え共用トイレはウサギ穴のようにせまい。おっさんのウンコの臭いが染みついて、息を吸えば吸うほど身体の中に汚染物質が溜まっていく感じがする。落書きだらけの壁。色褪せた「世界一周旅行」のポスター。黄色く乾いた床のタイルに干からびたゴキブリの死骸がひっくりかえっている。

おいおい、ここは牢屋の中か？

正直、便座に腰かけるのも嫌なんだけど、一度下腹を緩めると薄い色の尿があとから、出てくるわ、出てくるわ……飲み過ぎたあとの排泄のさなかに湧きあがるエクスタシーに何か呼び名はあるのだろうか。

二十秒ほど眼を閉じて、今日飲んだ酒の量を慎重に数

える。ビール三杯、日本酒一合、ウイスキーの水割り二杯……片手を少し超えるくらいだ。常識の範囲内だろう。たぶん。

個室に戻ると、輪廻が緑茶を飲んでいた。「ラストオーダーだって」呼び出しボタンを押しかけたあたしを制するように、ジョッキになみなみ注がれたウーロン茶を押しつける。

「ビール腹。おしっこしても凹まないね」

「輪廻のおっぱいとおんなじだ」

「私の胸にはビールなんて入っていません」

それは、ブラックジョークか？

輪廻がケラケラと笑っている。メロンなりに大きな胸がワンピースの下で揺れる。首の下までしっかりとボタンを留めたロリータ趣味の清楚な服。その下からみだらな女のおいがする。触れば胞子を吹く毒キノコのように、やわらかなおっぱいから香ってくる魔性の芳香。どんな男も、彼女を抱きたくてたまらない……きつと。

「また触って、何回目？」

「おっぱいに触れていないと死んじやう病氣」

「自分のがあるでしょ」

「輪廻が良いの。世界中で輪廻がいちばん」

他愛ないじゃれ合いがいつまでも続きそうに思えたとき、輪廻の顔の陰影が変わった。こほん、と小さな咳をして、唇をぬぐう。ゆっくり席を立つ。通路の途中で大きくよろける。腕を掴むと肩先が震えた。怯えた仔犬のような目。

「満月……」

甘いアルコールの息の中に、わずかな血のにおいが混ざっている。胸元のボタンを外して、レースの施されたキャミソールの中へ手を滑り込ませると、ばんばんに腫れあがった胸がブラジャーから飛び出していた。

ああ、始まっている。

勘定を支払うと、彼女の肩を抱いて駅まで急ぐ。

終電はとうに過ぎてているが、ロータリーにタクシーが停まっているはずだ。輪廻は耐えきれずに口から液体を吐き出した。さきほど飲んでいた緑茶がアスファル

トに大きな染みを作る。

吐いたのは水。でも、油断はできない。

タクシーに揺られている間、輪廻は窓に頬を押しつけていた。外の景色を眺めて気を紛らわせているようだ。だが、車が西新宿へ続く緩やかな傾斜を駆け下りたとき、唇から唾液とは違うどろりとしたものが零れ落ちた。慌てて口をふさぐが、賞味期限の切れたヨーグルトのような、強烈な臭気はごまかせない。フロントミラーに映る運転手と目が合う。白髪のみじった太い眉の下で、訝しげに歪んだ眼がじつとこちらを睨んでいる。

「厄介事は御免だぞ」

年老いた目がそう言っている。

「こっちは自分のことで精いっぱいなんだ」

誰が男に頼るか、ボケ！ 返事代わりに、鏡越しに睨み返した。

マンションの近くに車をつけてもらうと、負傷した兵士をかばうように輪廻の肩を支えながら車を下りた。汗で湿った前髪の隙間から、ライトアップされた新宿

の高層ビル群が見えた。屹立したいくつもの黒いシルエット。無数に空いた窓の目がもの言わずこちらを見つめている。何かに対して毒づきたくなる衝動を飲みこんで、蛍光灯の切れかけた長い廊下を進む。

玄関のドアを開けると真っ先に飛び込んでくるサイモン・ピンクの壁。

あたしたちのねぐらはデザイナーズマンション崩れの、不思議な形をしている。五メートルはある異様に長い廊下の先にキッチン付きのリビングがあり、リビングの両脇に二つの部屋——寝室と浴室がある。窓際にはバルコニーが二つ。カーブを描いて左右の部屋と接合するように細い道が続いている。个性的で暮らしにくい構造だが、そのおかげで立地の割に家賃が安い。

家の敷居につまずいて玄関先に倒れ込む。衝撃で吐き出される。びちびちと、胃の腑からせり上がってくるような、おびただしい量の血液。フリフリした洋服が隅々まで赤く染まる。どんなに汚れた便所でさえも嗅いだ事のないすさまじい悪臭。

スプラッター映画もここまで過度な演出はしない。血糊だつて量を使えば嘘っぽく見える。けれどもこれは現実なのだ。失血死するほどの血を流しても死なない人間が現実にいる。

そしてそういう人間は、現実に認められていない。洗面所にポリバケツを取りに行く。バケツに向かつてグログロ吐血し続ける輪廻の背中を軽く叩く。

玄関は殺人現場のようなありさまだ。雑巾を持ってきて、床に浮かんだ血を吸わせる。洗面所ですすいで、また血を吸わせる。そのように玄関と洗面所を何往復かした後、乾いたタオルで残った血を拭いた。凝固する前だったのでほとんどの血は拭きとれたが、タイルの隙間に沁み込んだ一ヶ所だけ、不自然な格子縞を残した。

この家には輪廻が作りだした幾何学的な染みがたくさんある。

「気分は？」

「うん」

「うん？」

「口の中、気持ち悪い」

「風呂まで行ける？」

「うん」

洋服の上からシャワーをかけると、血まみれ殺人犯の女が元の可憐な輪廻に戻った。

毎月のことなので、むせ返るような血腥さにも慣れたものだが、あいにく今夜はコンディションが悪い。ビール味の胃液が早くも逆流しかけている。シャワーヘッドを輪廻に預けて、夜風に当たりにバルコニーへ出た。

我慢ならない吐き気を紛らわすため、メンソール煙草に火をつける。煙草は唯一の治療法。気分転換、ストレス解消、精神高揚、気力回復。とにかく元気になりたいときはセーラム・アラスカに火をつける。輪廻は極端に煙草を嫌うが、今日くらい大目に見てくれるだろう。

心地よい清涼感にうっとりしていると、ふと誰かの視線を感じた。バルコニーから身を乗り出して迎っているうちに、胸のざわつくその視線が七メ

ートル下から向けられていることに気がついた。超新星爆発のように強い光を放つ自販機に照らされて、真っ白な女の顔がくつきりと浮かび上がる。

危うく、口から煙草を落としそうになった。

身を乗り出して、まじまじとその顔を見つめる。

鏡の反射かと思うくらい似ている。

風呂場でシャワーを浴びている草薙輪廻くさなぎの顔に。

そっくりだった。

「煙草、身体に悪いわよう！」

女は叫んだ。輪廻の声で。自販機の陰で大きく手を振りながら。女は笑っていた。ぶんぶんと手を振り回し、嬉しそうに笑っていた。

生ぬるい夏風に吹かれて、真っ黒な前髪がさらさらと揺れた。間違いなく、彼女は輪廻だった。あたしの恋人・草薙輪廻。

吸殻をスリッパで踏み潰した。身体が震える。それでも勇気を振り絞って、風呂場に向かって呼びかけた。

夏といえど、早朝は肌寒い。ジーンズに足を通すと腿のあたりがキリリと冷えて、すぐさま両手の摩擦熱で温めた。網戸を開け、バルコニーに出る。青紫色に染まった空の彼方に朝日が昇り始めている。「ヘイ・ジュード」を口ずさみながら、セーラム・アラスカに火をつける。

冷たい煙を三口ほど肺に流し込んだところで、ほんのりと浮遊感に包まれる。ああ、これこれ。この恍惚。「薔薇色の人生」。無意識の底からそんな言葉が浮かび上がってきたけれど、あたしたちの人生は一つの色に染まれるほど単純じゃない。

清々しい気持ちの裏で、名状しがたい不安と焦りがじわじわと心を蝕んでいる。洗面台の前に立つとその気持ちはどうしようもないほど重みを持ってずしりと両肩にのしかかる。いつだってそうだ。どんなに美しい空の色も、この顔を前にするとすっかり色褪せてしまう。

カラス色の髪の毛。

悪魔じみた浅黒い皮膚。

凹凸の深い顔と、紅色の目。
日本人離れた異端のかんばせは、母親譲りのもの。

幼い頃、目が覚めたらこの顔がごく普通の日本人女児の顔にすり変わっていないかと、夢見ていたものだった。駄目なものは駄目と神様が制するかのごとく年を取っても変わり映えのない顔に嫌気がさし始めたころ、力任せに両頬を引っぱたくと心がすつと晴れるような、爽快な気持ちになることに気がついた。

掌形の朱印がついた両頬がじんじんと痛んで、今日もやってしまったと気づく。これも自傷のうちに入るのだろうか。

痛む頬をさすりながら言い聞かす。

落ち着け。

思い出せ。

お前は誰だ？

「あたしの名前は、坂下さかした満月。二十五歳と三ヶ月」

あと二年くらい、生きていたい。

月の輪廻

2016年6月18日・19日福岡ポエイチ
にて発売予定°

・A5サイズ　・111ページ　・価格未定

あらすじ

25歳の坂下満月は同性の恋人・輪廻と暮らしている°

輪廻は胸に子宮を持つ奇病に犯された女の子°

彼女との関係がぎくしゃくする中、輪廻とそっくりの顔を持つ輪廻子が満月の前に現れて……………°

作・天野 蒼

表紙写真・兎澤 との